

主日礼拝説教「外なる声を聴く」予稿

日本基督教団石神井教会 2025年11月2日聖徒の日

【旧約聖書日課】創世記 4章1～10節

¹さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。²彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。³時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。⁴アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、⁵カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。⁶主はカインに言われた。

「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。⁷もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」

⁸カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。

⁹主はカインに言われた。

「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」

カインは答えた。

「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」

¹⁰主は言われた。

「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。」

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 3章9～18節

⁹神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にいつもあるからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。¹⁰神の子たちと悪魔の子たちの区別は明らかです。正しい生活をしない者は皆、神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も同様です。

¹¹なぜなら、互いに愛し合うこと、これがあなたがたの初めから聞いている教えだからです。¹²カインのようになってはなりません。彼は悪い者に属して、兄弟を殺しました。なぜ殺したのか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。¹³だから兄弟たち、世がああなたがたを憎んでも、驚くことはありません。¹⁴わたしたちは、自分が死から命へと移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛することのない者は、死にとどまったままです。¹⁵兄弟を憎む者は皆、人殺しです。あなたがたの知っているとおり、すべて人殺しには永遠の命がとどまっていません。¹⁶イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。¹⁷世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。¹⁸子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。

【福音書日課】 マルコによる福音書 7章14～23節

¹⁴それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。¹⁵外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」¹⁶† ¹⁷イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた。¹⁸イエスは言われた。「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分らないのか。¹⁹それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物清められる。」²⁰更に、次のように言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。²¹中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、²²姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、²³これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

自分の兄弟を愛する【こども説教のために】

日曜日の教会に集められたわたしたちは、互いのことを「兄弟姉妹」と呼び合います。人として生んでくれた父母はそれぞれ違うかもしれませんが、主イエスに導かれて「神の子ら」として一つになるようにされたからです。「天の父」である神の「子ら」ですから、互いに「兄弟姉妹」なのです。ですから、教会は、「天の父」のもとに長兄の「主イエス」に導かれる「兄弟姉妹」たちの家族、「神の家族」です。

「家族」が互いに愛し合うのは、当然です。「家族」は、互いに愛し合う二人が結ばれることから始まるのです（創 2:24）。その「家族」の一員として生まれてきた「兄弟姉妹」たちは、互いに愛し合うようにされていますし、そうなることが期待されています。

ところが、わたしたちは、兄弟姉妹同士で、どういうわけか仲たがいに、争い、激しく衝突することがあるのです。兄弟がいるのに互いに喧嘩をしたことがない、という人はほとんどないでしょう。もちろん、ほとんどの兄弟喧嘩は、しばらくすれば仲直りして、家族として互いに愛し合う関係を取り戻すことになるでしょう。同じ親から生まれた兄弟同士だからです。

カインとアベルの兄弟のように、怒りにまかせて殺してしまつては、取り返しがつきません。

「神の家族」として歩むように導かれてきたわたしたちも、互いに「兄弟姉妹」同士ですから、喧嘩することもあるかもしれません。そうであれば、「天の父」の「子ら」として新しく生まれるようにされてきたことを、いつも思い起こすのです。わたしたちを互いに「兄弟姉妹」として共にいるようにしてくださったのは、「天の父」である神なのです。神が、主イエスを通して、わたしたちに御自身の命を与え、「子ら」としてくださっているのです。

「弟はどこにいるのか」

わたしたちの教会が属する日本基督教団では、伝統的な教会暦に従って、11月第一日曜日を「聖徒の日」と定めています。かつての「諸聖人の日」を受け継いだ「死者の記念」をする日です。石神井教会の歴史を紐解くと、初代・石井牧師の時代には七月に「召天者追悼礼拝」が行われていましたが、第二代・齋藤牧師の時代からは11月第一日曜日に「永眠者記念礼拝」が行われてきました。これが、前任・大島牧師の時代に少し前倒しをして10月に「在天会員記念礼拝」の呼称で執り行われるようにされてきたのです。今日は、多くの教会で「永眠者記念礼拝」が行われていますから、わたしたちの教会のメンバーの幾人かは、関係する教会の記念礼拝に出席されています。

日曜日の教会をお休みになられるにあたって、牧師にあらかじめお知らせくださる方々があります。お仕事のため、旅行のため、他の教会に出席するため、またご病気や家族の事情のため、礼拝においでになれない方が、毎週一定数いらっしゃいます。人数の多い教会ほど、その割合は高くなります。石神井教会は、比較的その割合が高いようです。その一人ひとりの事情を、牧師が承知しているわけではありません。知らせてくださる方がある一方で、何もおっしゃらない方も少なくないからです。牧師から「なぜお休みになったのか」とお尋ねすることも、あまりしないようにしています。

そうだとすると、牧師は関心が無いわけではありません。日曜日の営みが終われば、礼拝出席表を必ずチェックします。来られていたのに印がつけられていなければ、つけておきます。はっきりしなければ、週報棚やライブ配信をチェックすることもあります。そして、来られていない方たちの確認をするのです。どのような事情がおありなのかと、思い巡らすこともあります。

「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」

弟アベルを殺してしまったカインは、そのように問われました。彼は、もちろん弟アベルがどこにいるのか、知っています。けれども、「**知りません**」と答えたのです。「**わたしは弟の番人でしょうか**」と。

牧師は、教会の管理を任されている者ですが、皆さんの「**番人**」というわけではありません。皆さんも互いの「**番人**」になろうとは思われたいでしょう。けれども、わたしは、教会という「**神の家族**」に仕える者として、神から皆さんの中の一人のことを問われて、「あなたの兄弟、姉妹は、どこにいるのか」と言われたならば、「**知りません**」とは言えない、という思いがあります。皆さんにも、お互いのことを問われて、「**知りません**」と言い捨てていただきたくない、という思いがあります。「あの人のことは知りません」という応答は、その人を殺すのと同じだからです。たとえ殺人を犯していないとしても、人としての関りの中で抹殺しているのと同じだからです。

人の中から出て来るもの

使徒書（ヨハネの手紙一）は、「子たちよ、言葉や口先だけでなく、行いをもって誠実に愛し合おう」と呼びかけています。主イエスが「新しい掟」としてお教えくださったという「互いに愛し合うこと」を、信仰によって兄弟姉妹となった互いの間で、もっと誠実に行おう、と言うのです。

同じ手紙の中では、もっと強い調子で、こうも言われています。「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

この手紙がやり取りされた教会では、神を愛し、礼拝することは熱心になされていたけれども、互いに愛し合うことにおいて問題があったのかもしれませんが。実際に対立や衝突があったのか、それとも、互いに対する無関心が蔓延していたのか、実態は分かりません。けれども、互いの関係が好ましいものとは思えない実情があったのでしょう。少なくとも、手紙を記した者には看過できないと思われることが起こっていたのです。だからこそ、少し強い口調で、「自分の兄弟を愛さない者」は、「神の子たち」ではなく「悪魔の子たち」に属するとさえ言っているのでしょう。

もちろん、お互いのことを「神の子たち」と「悪魔の子たち」に分けて、対立させても仕方ありません。手紙を記した者も、対立を煽りたいのではありませんでしょう。何となれば、主イエスは、わたしたち誰もが「悪い者」の素質を持っているとお教えだったことを、知っていたはずだからです。

「人から出てくるものこそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来る」と、主イエスは言われます。それが、人間の素の姿なのです。わたしたちの自分の内面にあるもの、もしかすると普段は自分でも隠しているかもしれない深い底に沈め込んでいるもの。ドロドロとしたヘドロのような汚れた考えが、そこにはある。それが、ときに噴出してきて、わたしたちの行動を誤らせるのです。「互いに愛し合うこと」とは真逆のことを、させてしまうのです。しかも、巧妙な方法で、わたしたちの意識や考えをも左右させるような仕方です。後で気づいたときには、もう、互いの関係を壊してしまった後だったりするのです。

「外から人の体に入るものは、人を汚すことができない」と、主イエスはおっしゃいます。主イエスは、食べ物のおっしゃっているのです。「悪い者」の素質を持つわたしたちは、ただ、神から与えられるものによって新たに生まれるしかありません。神から「命の糧」をいただくのです。神の「御言葉」を、そして、主の食卓の「パンと杯」をいただく。その営みの中から、互いに愛し合う兄弟姉妹としての歩みを、繰り返し歩み直すのです。